黄秋耘インタヴューに見る反右派闘争
―沈黙に甘んじようとした人々―

廣　野　行　雄

I

1．沈黙に甘んじること

駿河台大学論叢第29号所載「丁玲の『我々夫婦のあいだ』批判をめぐって」の冒頭，筆者は，王蒙が蕭也牧の思い出を語った文章の一節を引いた。それは，丁玲から理不尽な批判を受け，ほとんど作家生命を絶たれたに等しかった蕭也牧が，王蒙に「沈黙に甘んじる」ことを勧め，「寂寞に甘んじられなくて卑しいことをしてはいけない」と戒めたというものであった。その蕭也牧も，1957年の反右派闘争では，「もう黙ってはいられない」と題した劉紹棠批判の文章を書いてしまう。王蒙もいうように，「沈黙に甘んじることが一番苦手で，何よりも寂寞に耐えられぬ人種であ」る作家というものの有り様をよく表しているのであろう。とりわけ知識人に現実的な政治参加を要求する儒教文化の伝統を有する中国においては，いっそうその傾向が顕著である。そのような事柄をふまえた上で，筆者は，次のような一節を書き記して結びに代えたのであった。

> たしかに誰もが蕭軍のように生きられるものではない。そのうえ丁玲には，国民党によって数年間監禁されていたという過去に対する負い目があった。そのことを考慮に入れずに彼女のその後の生き方をあげつらうのは公平とはいえまい。しかし，それにしても，そのことを十分考慮したとしても，心の奥に如何なる権威にも支配されない堅い自分を保持しつつ沈黙を続けるという道も選択できたのであり，そのような人生を生きることと他者の内面の自由を奪おうとする権力の横暴に積極的に加担することとは同日に論ずることはできないだろう。[1)]

「沈黙を続ける道も選択できた」と断定的に書いたについては，あてもなく，かくあれかしと思うあまり口が滑ったというのではない。蕭軍の生き方を一方に対置していることは，いうまでもないが，実は，こう書いていたときすでに，黄秋耘と

いう人物のことが念頭にあったのである。本稿で取りあげるインタヴューは，1998年に発表されたものであるが，その後，許されて北京で在外研究を行ったおり，幸いに彼の4巻本の文集[2)]を手にすることができたので，それをも参考にしながら以下些かの考察を試みたいと思う。

2．黄秋耘インタヴューの意味

反右派闘争が，どのように発生し，展開していったかについて歴史的に叙述した著作・文献は，ほとんど枚挙にいとまがない。一方，一個人がそれをどのように知り，どのようにその中に巻き込まれ，どのようにそれに対処しようとしたかについての具体的な叙述も，限られた数ではあるが，相当の分量に達しているように思われる。そのようなものとして，すでに，われわれは，従維熙の『走向渾沌』や劉賓雁の『自伝』，陸文夫の『却顧所来径』，王蒙にたいする何回かのインタヴューなどをもっている。ただ，いわゆる歴史的叙述というものが，毛沢東という最高指導者の動きを中心として，時間を追って鳥瞰的，俯瞰的に語られているのとほとんど対をなすように，これらの体験談は，いわば青天の霹靂のようにふってわいた災難に，その由って来たるところをたどり得ず茫然としている被害者の視点から語られており，その両者を繋ぐ部分のようすとなると，案外に目にすることが少ないように思われるのである。つまり，反右派という政治運動，言論弾圧運動において，頂点にあって，それを企図し，発動したものと，それによって被害を受けたものの状況を記したものは多いが，たとえば，ある「単位（ダンウェイ）」において，実際にどのように運動が進行していったかとか，実質的な運動にたずさわった，たずさわらざるをえなかった，末端の「干部（ガンブウ）」たちの思考，感情，行動のありあさまなどについては，いわば状況証拠から，漠然と想像していたにすぎなかったように思う。

本稿で取りあげる黄秋耘へのインタヴューは，そのような部分について，まことにリアルなイメージを与えてくれるものとしてきわめて貴重であるといえよう。

3．黄秋耘という人

インタヴューそのものについて見る前に，黄秋耘という人物について，簡単にその経歴を紹介しておくことにしたい。

黄秋耘は，1918年広東省順徳（広東市の南30kmほどの珠江デルタに位置する）に生まれた。もとの名は，超顕といったが，建国後秋耘と改めた。中年になってから文筆の世界に入ったので，他人が収穫する時期に耕しはじめたという意味である

という。父親は西洋薬の薬屋を経営しており，経済的には比較的ゆとりがある中産階級の家庭で育ったようである。また，文化的な環境にも恵まれており，父方，母方ともに親族には，古典文学の素養のある人が多く，特に母親の兄馬小進は，詩人で南社の一員であり，彼の詩集『寒鴉集』から大きな影響を受けたと秋耘自身が言っている。

香港で中学の課程を終えた後，清華大学に入学した。ここで，のちに『文芸学習』の編集長となる韋君宜と知りあった。1935年12月のいわゆる一二九運動に参加し，翌36年10月入党，38年から香港八路軍弁事所の，43年からは第七戦区軍事調査所において，49年には中央軍事委員会中南連絡所の工作員として，諜報関係の仕事に従事した。黄秋耘は，この経歴が，後に自分を右派となることから救った一つの要因になったのではないかと推測している。52年に新華社福建分社社長代理を務めた後，54年には邵荃麟の抜擢により，上京して，創刊されて間もない『文芸学習』の副編集長に就任した。

双百運動期間中には，『人民の苦しみを前に目をふさいではならぬ[3]』『魂を錆びつかせた悲劇[4]』，『シニシズムのトゲ[5]』，『トゲはどこにあるか[6]』などの“雑文”によって，中国とりわけ文芸界の病根を鋭くえぐり出した。また，韋君宜とともに，反右派闘争開始以前から問題とされていた王蒙の小説『組織部に若者がやってきた』をめぐる誌上公開討論を『文芸学習』で展開し，筆禍事件化するのをくい止めようとした。反右派闘争が始まると，上記のような彼の動きが批判の対象となったことは，言うをまたない。しかし，種々の要因から，彼は右派にされなかった。この間の経緯については，拙論の主要な内容とも重なるので，後に詳述することとする。

右派の嫌疑からは，からくも逃れたものの，一時河北省の張家口地区の涿鹿県三堡村へ下放された。やがて，『文藝報』の編集部へ復帰することにはなるのだが，再訪した三堡村の大躍進運動後の惨状を目にして書いた歴史小説『杜甫家族のもとへ[7]』，『魯亮儕印を取りあげる[8]』が大躍進運動の失敗を諷するものとして批判された。さらに64年の中間人物論批判では，邵荃麟の談話を文章化して『文藝報』に掲載する過程で，“中间状态的人物（中間状態にある人物）”という言葉が，文中にくりかえし出てくるので，修辞上の配慮から，“不好不坏，亦好亦坏，中不溜儿的芸芸众生（善でも悪でもなく，善でもあり悪でもある，どちらともつかない多くの人々）”という表現に取り換えたことから邵荃麟の共犯とされた。黄秋耘に言わせると，彼にとっての文革は，２年ほど早く，この時に始まった。“網から漏れた右派”であったがゆえに，57年から64年まえの７年間は，“缓刑七年（執行猶予七年）”

に等しかったという。

文革が始まる直前，一ケ月あまり前に，広州の新聞『羊城晩報』に転勤させられていたが，『三家村札記』が批判されると，すぐに，『貴州日報』で『魯亮儕印を取りあげる』が，つづいて『人民日報』で『杜甫家族のもとへ』が，呉晗の『海瑞免官』と軌を一にするものとしてやりだまにあげられ，その年の秋には，上京して運動に「参加」することがもとめられ，三人の同僚といっしょに ── 実のところ三人は見張りで，護送されるというに等しい ── 北京にもどった。北京では作協のメンバー邵荃麟，劉白羽，陳白塵などとともに，北京市内の作協宿舎（以後何度か場所が変わる）に軟禁状態となり，“走資派”として“衝撃（攻撃・突撃）”される日々を送る[9]。69年９月釈放されて，広州に戻り，英徳黄陂幹校（いわゆる五七幹部学校）で牧畜にたずさわった。70年９月には，広東省革命委員会宣伝弁公室に配属され，燃料化工調査組で石油化学工業関係の仕事を担当させられたが，翌年秋には，広東人民出版社へ移り，出版編集の仕事に復帰した。文革末期の75年には，百科性辞書『辞源』の編集にたずさわり，そのまま文革の終焉を迎えた。

このインタヴューは，前書きによると，1997年の２月から３月にかけて前後８回，広州梅花村の黄秋耘の自宅において行われたものである。ただし，『新文学史料』には，1997年２月26日，27日，３月３日，５日，11日，17日，21日（いずれも当日の午前中）の日付を付された，７日間７回分が掲載されている。インタヴュアーは，長年雑誌『随筆』の編集長をつとめ，ツルゲーネフの翻訳家としても知られる黄偉経で，２月26日，27日，３月３日の３回分が季刊『新文学史料』1998年第１期に，残りの４回分が同誌1998年第２期に分載された。その後，『新文学史料』の当該記事を読んだ当事者（文中で名前があげられている人物）から寄せられた，固有名詞や日時などの記憶違いを訂正する手紙の内容などを注記して，黄秋耘の著作集『黄秋耘文集』の第四巻に収められた。なお，『新文学史料』掲載時，文集再録時も題名は，『文学の道での六十年―老作家黄秋耘インタヴュー[10]』である。

Ⅱ

１．1957年５月18日

一般的な歴史叙述によれば，1957年５月15日の毛沢東の内部向け文書「事態は変化しつつある」によって，それまでの双百運動からの反転が決定され，同じく毛沢

東の起草になる６月８日付党内指示「力を結集して右派分子の猛り狂う攻撃に反撃を加えよう」，同日『人民日報』社説「これはなんのためか」によって，反右派闘争の開始が公にされたわけである。一般の人々が，６月８日になってはじめて，しかも突然に新たな政治運動の始まりを知ったであろうことはいうまでもあるまい。また，一般党員も５月18日の時点では，「風向き」がまったく逆になることは知らされていなかった。「２月27日」のインタヴューでは，この間のことが生々しく語られていて非常に興味深い。以下，そのあたりにふれた部分を引用する。

秋耘：……その他に，反右派が始まる前，邵荃麟はすこぶる無邪気にふるまっていて，ほんとうに大鳴大放が必要だと思っていて，昔の友達や部下に鳴放を呼びかけるために，浙江へ飛んだりしたんです。

偉経：陳学昭も動員されたんですね。彼女が生前私に邵荃麟に動員されて浙江へ行ったということを話していました。

秋耘：その他にももっと中心的だったのは，浙江省の工商連主席だった曹という人で，やはり彼のかつての部下だった。彼は杭州へ行くと，かつての部下や友達に「さあ，大鳴大放して，共産党の整風の手伝いをしなくちゃならんぞ」と煽った。彼はまったく無邪気で，その後風向きが急に変わるなんてまったく思っていなかった。

偉経：“蛇を穴からおびき出す”というやつですな。

秋耘：邵荃麟は，まったく無邪気だった。昔からの友達や部下たちを鳴放させ整風の手伝いをするのが，党のための仕事だと思っていたんだから。後になって風向きが変わってびっくりして，そこではじめて気がついたわけだ。

　反右派は1957年の６月に始まったわけだが，５月18日の夜，私は邵荃麟の家にいたんですよ。私と彼とは指導幹部と部下の関係だったけど，友達同様まったく気の置けない間柄で，普通にみられる指導幹部とその部下というふうじゃなかった。その夜，彼は開口一番，“アジる”ために浙江の杭州へ行って，大鳴大放するように大勢の人間を激励した様子を話し，私はそれを聞いていたわけです。しばらくすると電話がかかってきた。そこに居はしたけど，人の家で電話に出るわけにもいかない。邵荃麟自身がでたが，受話器を取ってきいたあと，すぐに「フン，フン，フン，わかった。すぐ行く」と言った。顔色が変わっていましたよ。

偉経：ホーッ，誰からの電話だったんです。

秋耘：彼が受話器をおろすのをまって聞きました。「誰からだったんです」私は彼が

答えないだろうと思ってました。

「周揚からだ。風向きが変わった」

まさしく“機密”が漏らされたひと言でした。その時，５月18日には，よそではまだ大鳴大放が続けられていて，誰も一気に反右派へと転換していくことを知らなかったわけです。それは極秘事項でした。「どうします」と聞いたら，彼は「君は帰ったら，絶対に何もしちゃいかん。文章を削るとか，版面を差し替えるとかいったことは，一切しちゃいかんぞ。たとえ君が何かしても間に合わんし，間に合ったとしてもやっちゃいかんのだ。何かしたということは君が事情を知っていたということだから，必ず上から厳しく追及されて，えらいことになる。私も同罪だ」

アハハハ，まさに“反党同盟”だね。すぐに帰ったが，もう九時を過ぎていました。[11)]

当時，邵荃麟は，中国作家協会の党組織の書記兼作家協会副主席であり，周揚は，中国共産党中央宣伝部の副部長であった。この当時の作協党組書記・副主席の立場・権限がどのようなものであったかについて，上の対話は，一定の想像のよすがにはなる。邵荃麟は，５月15日に政策転換の決定が下されていることを，まったく知らないで，はるばる浙江までアジテーションに行っているのだから，時々の枢機に直接参画することはできなかったのであろう。“反右派”には，党内粛清の性格もあるので，15日の決定は，内部向けとはいうものの，ごく ── と言ってよかろう ── 限られた範囲の高級幹部にしか知らされていなかったのは，当然と言えば当然である。周揚とはそこに一定の違いが存在する。しかし，末端の党員のように，ある日突然決定された政策が伝達されるというのではなく，間接的に，たとえば最高指導者から意見を聴取されたり，現場の様子を報告したりするかたちで関わる場合もあり得るということであろうか。

では，18日に周揚が邵荃麟に“反右派”が発動されるという情報をもたらしたことについては，どう考えればいいのだろうか。周揚が，すでに15日の時点で，そのことを告げられる少数の人間のひとりであった可能性は非常に高い。ただ，周揚が，その情報を邵荃麟にも与えるということが，一般的な職務上の手順としておこなわれたものなのか，それとも私的な行為としておこなったものなのかという疑問は残る。一方，邵荃麟が黄秋耘に，その時の電話が周揚からのものであり，「風向きが変わった」ことを洩らしたのは，そうすべき必然性が全くない以上，明らかに個人

的な好意 ── あるいは，よくも悪くも中国社会の一大特徴である“关系guānxi（人的関係）”── に基づくものと断定してよかろう。だが，もし，この時偶然に黄秋耘が邵荃麟の家に来ていなければ，邵荃麟がわざわざ黄秋耘に，その情報を教えたであろうかということになると，絶対とは言い切れないにせよ，おそらく，それはなかったのではあるまいか。

ある政治運動が発動される場合，事前にどこまでの範囲で，その情報が伝播されているかというのは，非常に微妙な問題であり，かつまた，偶然に左右される面も存在したのだといえよう。

邵荃麟は，黄秋耘に，“機密”を知ったことをうかがわせるような言動をとることをかたく禁じた。黄秋耘は，確実に自分を苦況に陥れるであろう『トゲはどこにあるか』の掲載を差し止めることはしなかった。しかし，葉永烈の労作『反右派始末[12)]』に，次のような挿話が紹介されている。

毛沢東は，かねてから頻用していた“深く敵を誘い込む”戦術にのっとって秘密裏に粛清の準備を進めていたが，経済学者の葛佩琦が，６月５日の座談会の席上，“ある人”から政治運動の発動が近いので発言に注意するよう示唆された旨の発言をしていたというのである。葛佩琦は，“ある人”が誰であるか「思い出せない」として明かそうとしなかったが，葉永烈は，その“ある人”が黄秋耘であることを彼の自伝『風雨の歳月[13)]』によって知る。自分に不利になることについては動かず，他人が災厄から逃れる可能性があれば，敢えて“機密”を洩らす危険をも冒す。このエピソードは，黄秋耘の人となりの一端を示しているように思われる。

２．作協における反右派

前述したように，ひとつの“単位”で，どのように“反右派”が推進されていったのかについての具体的で詳細な証言は，あるようにみえてなかなか見つからないというのが実情である。以下は，作協[14)]における運動の実際にふれた部分である。

偉経：秋耘同志，今日は作協の反右派運動について話していただきたいんですが。

秋耘：作協の反右派運動は，主に劉白羽の指揮下で行われました。当時の作協の党組書記は邵荃麟だったが，この前話したように，彼自身は“党の整風を手伝う”のだと思っていて，浙江まで“アジ”りにいってたわけだから，反右派が始まると，いろいろ考えた結果，先頭に立って，この運動を指導するというわけにはいかなかったんですね。副書記は二人いて，一人は郭小川，もう一人は劉白羽。郭

小川という人は，詩人気質で，そんな政治運動はやりたがらなかったし，それ以上に，彼には指導をまかせきれなかったんでしょう。そこで劉白羽がやることになったわけだ。劉白羽が反右派をやることになって，彼はそれをやるための班をつくりました。その班に入った人は，無名の人で全員作協内の一般職員でした。

偉経：全員行政幹部職員だったんですか。人事幹部職員ですか。

秋耘：全員というわけじゃない。その中で，主だった人は，王翔雲といって作協事務室の主任だった。

偉経：王翔雲は今も健在ですか。

秋耘：健在です。

偉経：延安にいた人ですか。

秋耘：いや，彼女は国統区から来たんだ。その他には，丁寧。それから，羅立韻。それに林心という人，この人は体委から転勤してきたんだ。それから，胡海珠，この人には欠点があって，教養がないうえに，政治的に非常に浅薄，盲従というというんですかね，上から言われたことをそのまま執行するんですよ。劉白羽がこの人間はよくないと言っただけで，もうその人が悪いということを物語るような材料を調えるんだから。劉白羽は，彼女たち何人かで一つの班を作って，内部および外部からの調査をやらせたんです。劉白羽がなぜもっと聡明で有能な人間を選んで調査をやらせずに，彼女たち五人を選んだかというと，こういった人間を利用したんですよ。

偉経：秋耘さん，できる限り詳細におっしゃってくださいませんか，今となっては，もうあの当時の作協の反右派闘争の様子を伝える文章は何もないのですから。

秋耘：劉白羽がなぜそのような人達を利用したかというとですね，そのような人達は非常によく言うことをきいて，使いやすく，彼がどこそこへ行けというとすぐにそこへ行くというふうだったからですよ。それが劉白羽が反右派闘争を推し進める上で特に有利だった点ですね。彼が，もっと聡明で有能な人間を使わなかった，あるいは敢えて使おうとしなかったことについては，彼の考えがあり，彼にとっての理屈があるわけです。おそらく，どの政治運動の時にも，それぞれの単位に，一般には積極分子，悪くいえば“手先[15)]”といわれる，こういう人たちがいたんでしょうな。いわゆる“手先”というものは，一定の教養もいらなければ，ある程度聡明な政治的頭脳も必要じゃなくて，何でも上からこうやれと言われたとおりにやればいいんですよ。

劉白羽は，この五人をどんなふうに配置していたかというと，作協の下に五つ

の単位があって，どの単位にも一つずつ党支部があって，各支部に一人ずつ調査員が配分されているんです。事実上，彼女たちは劉白羽が各支部に備え付けた道具なわけです。劉白羽は党組の副書記で，彼自身だって先走りすぎてはいけないと思っているから，いろいろなことについて邵荃麟などの指示を仰ぐわけですが，実際には，作協内部の反右派運動全体の動向は，劉白羽の手でコントロールされていたんです。このようにして，作協では劉白羽の指揮の下で反右派闘争が展開していったんです。だから，のちには多くの案件がうやむやのうちに処理され，根っから反右派という範疇に入らない問題で右派にされる人がでたり，何ということもない些細なことが，ひどく重大なことのようにされてしまうことがあったわけです。手続きも非常にいい加減で，冤罪かどうかといえばもちろん冤罪ですよ。劉白羽は，冤罪をでっち上げるのに，そのような人間を利用したんです。政治的にある程度成熟している人なら，彼のやり方に全面的に同意するなんてことはあり得ないわけですから。[16]

建国から文革終了まで，“単位”というものが中国社会ではたしていた役割・機能については，われわれ外国人には，十全に理解のとどかない面があるのだが，黄秋耘インタヴューでは，“反右派”のような政治運動も“単位”ごと，あるいは，いくつかの下部“単位”を統合した大きさの“単位”ごとにおこなわれていたことがわかる。作協が統合的な“単位”であり，『文芸学習』の編集局がその下の“単位”のひとつというようにである。インタヴューのなかで，丁玲が指導していた文学講習所における“反右派”では，誰が運動の指揮を執っていたのかとたずねられた黄秋耘が，「中央宣伝部が直接指揮を執ったんでしょう。周揚が誰を派遣して文学講習所の運動の指揮を執らせたかについては，わたくしは承知していません。文学講習所は，別のセクションで，わたくしたちとは別でしたから」[17]と答えていることからも，そのあたりの具体的な事情がうかがえる。

作協の場合は，インタヴューで語られているような事情から書記である邵荃麟ではなく，副書記である劉白羽が指揮を執ったが，一般にはやはり各“単位”の党組の書記が運動を組織し，推進していったのであろう。また，各下部“単位”の一般職員に対する処置を一々統合“単位”の書記が処理するわけにはいかないので，それをおこなう“手先”たちが編成される。ただ，インタヴューの別の発言によってわかるのだが，『文芸学習』の場合でいえば，編集長と副編集長及び行政十三級以上の幹部については，“手先”たちが担当するのではなく，中央宣伝部副部長であっ

た周揚の意を受けて，劉白羽が直接処分を決定したようである。

3．網から漏れた右派

『シニシズムのトゲ』で，文壇の政治に対する盲従的傾向を，『トゲはどこにあるか』で，文芸界にはびこる教条主義とセクト主義を，『魂を錆びつかせた悲劇』では，現場を指導する党組織に存在する事なかれ主義的傾向と投機的態度をえぐりだした劉賓雁のルポを高く評価し擁護した黄秋耘は，反右派開始当初，劉白羽から反党，反毛沢東思想，反社会主義の三反分子として名指しで批判された。また，中央宣伝部が発行した“批判資料用”言論集に名を連ねているのは，馮雪峰，丁玲，陳企霞，艾青，秦兆陽，劉賓雁，蕭乾，徐懋庸，劉紹棠，黄秋耘の10人であった。したがって，誰もが，彼が右派のリストにはいることは必至であると思ったにちがいない。事実，上の10人のうち９人までが，残らず右派とされた。先に挙げた葉永烈さえ，はじめは黄秋耘が右派であったと思っていたらしい。しかし，彼は最終的に右派のリストから外れたのである。

黄秋耘がリストから外された理由として彼自身があげているのは，まず，直接の上司であった韋君宜が彼をかばったことである。韋君宜とは清華大学の同窓生で，学生運動を通じて知りあい，同じ年に入党し，同じ支部で組織活動をしていた。建国後は，偶然韋君宜が編集長をしていた『文芸学習』に転属になり，彼女とほとんど二人三脚のようにしてはたらいていた。

秋耘：私の右派問題に話を戻しましょう。あの時，韋君宜がまず私のことを採り上げ，極力弁護してくれたんです。彼女は，各部署を駆け回って，「あなた方は，黄秋耘を右派にしようとお考えですが，それは不公平というものです。『文芸学習』では多くの決定をしましたが，そのすべてが私と黄秋耘とで行なったものです。いくつかの重要な事柄において私と黄秋耘は一致した意見でした。たとえば『新たに組織部へ来た青年』について『文芸学習』で行なった誌上討論には，黄秋耘はもとより参加しましたし，私も意見を述べました。それから『文芸学習』にショーロホフの『人間の運命』を載せるという重大な決定も，私と黄秋耘とでいっしょに行なったものです。『文芸学習』の主要な事柄については，誰に書かせるかであれ，どんなものを載せるかであれ，すべて私と黄秋耘が二人で相談して決めました。実のところ，杜麦青は関知していませんでしたし，加わらせもしませんでした。ですから，黄秋耘を右派にして，私をしないというのでは，彼を私のス

ケープゴートにすることになり公平を欠くことになります」と，涙ながらに訴えたんです。韋君宜の他にも，当時の部下たちの間でも議論があったんです。

偉経：韋君宜は，その時どんな人たちに掛け合ったんです。

秋耘：彼女は郭小川に話を持ちかけたんだ。当時，郭小川と劉白羽が作協党組の副書記で，書記は邵荃麟だった。そのことは，その後一，二年もたってから郭小川が教えてくれました。郭は，「あの時韋君宜はね，君を右派にするんなら，自分もすべきだと言うんで，処置に困ったんだ」と言っていた。[18)]

4．フルシチョフ秘密報告

黄秋耘が右派のリストから逃れえた二番目の理由として考えられるのは，それまできわめて教条的であった韋君宜がフルシチョフの秘密報告を聞いて非常に大きな衝撃を受けていたことである。たしかにそれは，直接的な理由ではないが，実は，これが一番重要な要素かもしれないのである。もし，これがなかったとしたら，若いころからの知りあいであったことや緊密な連携をとった同僚であったことなども，それほどの意味を持ち得なかったにちがいない。黄秋耘は，インタヴューのなかで，秘密報告を聞いた日のことについてもふれているので瞥見しておきたい。

秋耘：韋君宜は後にどう変わったか。正統的な教条主義者から何になったかというと ── 当時で言う修正主義的傾向だな。その後反右派でも彼女は，大変だったんだ。主要な原因はソ連共産党の二十回大会だね。

偉経：ソ連共産党二十回大会が転換点だったと？

秋耘：あれは大きかったね。

偉経：フルシチョフの反スターリン秘密報告を聞いた後ですね。

秋耘：そう。

偉経：当時私は大学生で，共産党員になったばかりでした。ロシア語新聞でフルシチョフの秘密報告を読んだんですが，当時まだ無知で幼稚でしたから，フルシチョフがスターリンに対して非常な敵意をもっていて，誹謗中傷しているというふうに思いました。

秋耘：あの時，作協内部では，劉白羽が私に伝えたんだが，彼はそんなふうには言わなかったね。あの文献は，重要機密だったから，一字一句抜け落ちてない。知らされたのは，十三級以上の党員幹部[19)]だった。作協であの秘密報告を聞いたのは，十人くらいしかいなかった。密室で，鍵を掛けてから読んだんだから。

（中略）

みんな報告のことを聞いた後は，ひどいショックを受けて，魂が抜け落ちたようになってましたよ。

（中略）

秋耘：私はもともと中聯部[20]の部級研究員だったんで，いろんなこと，メチャクチャな，どす黒いことを見もし，聞きもしてました。

あの日の午後2時から秘密報告の伝達を聞いたんですが，2時間か3時間それを聞いて，夕食前になってやっと聞き終わったんです。フルシチョフはとても能弁でした。スターリンがあんなにも多くの無辜の人を殺したということを聞いて，恐怖を覚えました。当時北京の郊外に住んでいました。現実生活を体験しようというわけです。私がいたのは北京郊外区温泉公社というところで，温泉が出たんです。組織から車を出してもらって帰りました。家に帰っても，やはり秘密です。あの頃蔡瑩（黄秋耘夫人：廣野）は，北京市委文教部で幹事をしていました。部長は廖沫沙です。聞いたことは，家に戻っても話してはいけないと上から言われていて，その決まりは非常に厳重でしたので私は一切そのことを漏らしませんでした。当時，韋君宜夫妻も北京市委の宿舎に住んでいて，私の家とははす向かいでした。その日の夜，私が彼女の家に行くと，彼女は我慢できないという様子で，泣きながら言いました。「秋耘，あなた今日聞いたこと事実だと思う。ホントなのウソなの」二人とも聞いたわけですが，知っている人は限られた範囲で，彼女が知っていることだって私より多いということはありません。何か隠しているというふうにも見えませんでした。「私の判断では，基本的な状況は事実で，いくつかの細かいところでは異同があるということなら，それも考えられないことではありませんよ」というと，彼女は「こんなこと考えたこともなかった。共産党の中でこんなことが起こるなんて」と言うので，私は「何も不思議なことはありませんよ」と言いました。私だってショックではありましたが，彼女のようにひどくはありませんでした。中聯部で聞いたり見たりしたウラの事情は多かったですから。だからソ連党内でスターリンの大量殺人がおこなわれたということも，確かにおどろくべきことであり，意外なことではあるが，考えられないことではない。私は，フルシチョフの報告が述べていることは，基本的に事実であり，ホントのことだと思うと言いました。こんなことは，作り出そうとして作り出せるものではないし，聞いてすぐにほんとうかウソか判断のつくことがたくさんあります。たとえば，会議のあと，何人かの指導者たちの顔色が変わっていたというような

細かい点は，つくろうとして作れるものではありません。その晩，韋君宜はひどく泣いていました。

ソ連共産党の二十回党大会の報告を聞いてから，韋君宜に百八十度の転換がありました。彼女はまったく変わった，前後で別人だった。[21)]

そもそも，“反右派”という政治運動が，スターリン批判演説，ハンガリー事件などの東欧での動きを前提として起こったものであるとすれば，まったくの偶然とはいえないわけではあるが，もしスターリン批判演説がなかったとしたら，韋君宜が黄秋耘の右派摘発に対して，これほど親身になって庇おうとすることはなかったにちがいない。韋君宜がそれまでいかに教条的であったかは，黄秋耘の『わたしの知っている韋君宜同志[22)]』に詳しい。いささかこじつけめいてくるが，黄秋耘を右派とされることから救ったのは，フルシチョフの秘密報告であったという，“春秋の筆法”もあるいは成り立つかもしれない。

5．黒幕“閻魔”

黄秋耘にとって幸いした，もう一つの副次的な要因として，彼を庇った韋君宜の人脈的背景の問題があげられよう。韋君宜がいくら黄秋耘を守ろうとしても，その韋君宜自身が右派にされてしまえば，万事休す，である。韋君宜にしっかりした後ろ盾があり，その足元が固められていてこそ，彼女の涙ながらの弁護も現実的な効力をもとうというものである。

偉経：当時韋君宜は作協党組の構成員だったんですか。

秋耘：彼女は作協党組の構成員で，私は作協機関総支部委員だった。当時としては，たしかに処置に困っただろうなあ（笑い）。韋君宜と私の両方を右派にしちまうというのは，やりにくいんだ。韋君宜はずっと胡喬木の下で仕事をしてきていて胡喬木と大変近しかったからね。それだから，胡喬木に何の挨拶もなしに，だしぬけに韋君宜を右派にするなんて，どうして簡単にできますか。ほかにも，胡喬木と周揚との関係も複雑だし。だから，中国では党内のことは，往々にして人と人との複雑な関係に関わってくるんですよ。韋君宜を右派にするとなると，周揚は自分と胡喬木との関係を顧慮せざるをえないわけだ。もし彼女を右派にしたとなると，“主人を見てから犬を殴れ”じゃないが，胡喬木を嫌な目に遭わせておいて，その後周揚はどんな顔をして仕事ができるでしょう。職階から言えば，胡喬木の

方が周揚よりも上なんだから。当時，胡喬木は中共中央書記部の書記で，周揚は中共中央宣伝部の副部長でした。

偉経：かたや党の指導幹部で，かたや党の中央宣伝部の指導幹部。

秋耘：地位や権力の上からいっても，周揚は胡喬木の相手じゃないですよ。胡喬木はね，毛主席の側近ですよ。みんな周揚のことを“閻魔大王”だと思ってたけど，その背後にいる，ほんとうの黒幕“閻魔”は胡喬木だったんだ。

偉経：ハハハ，その喩えは面白いなあ。[23)]

インタヴューの内容をなぞることになるが，作協の“反右派”運動を推進していたのは，劉白羽であり，彼の背後にいたのは周揚であった。一方，韋君宜の後ろ盾になっていたのは，直接のそれとしては，彼女が『文芸学習』に来る前に共青団中央宣伝部副部長をしていた時代から昵懇であった胡耀邦（当時共青団中央第一書記）であり，さらにその後ろに，胡喬木がいたのである。権力が党に集中している以上，行政官としての職階が，必ずしもそのまま権力の大きさを反映するものではないことはいうまでもない。党組織における序列こそ権力の大きさの実勢を表すものなのだ。あるいは，官僚の世界，もしかしたら企業の内側においても，それが一定以上の大きさの組織であれば，大なり小なり見られる現象であり，“常識”に属することかもしれないが，この時代の ── おそらくは現在も ── 中国には，とりわけ明瞭で確固とした ── しかしながら顕現的ではない ── ラインが存在したのである。だから，周揚をトップにするラインにいる劉白羽は，胡喬木の機嫌をそこねることを恐れた周揚から止められれば，胡喬木のラインにつながる韋君宜を右派として摘発することを諦めざるをえなかったし，彼女の黄秋耘に対する意向を無視するわけにはいかなかったのであろう。

6．情報将校として

韋君宜が黄秋耘をかばったということとともに彼を右派の網から逃れさせたことについては，彼の建国以前の仕事の特殊性が一定以上の意味をもっていたようである。

インタヴューで黄秋耘は，それまで厳しく彼を追及していた劉白羽が突然彼を右派にはできないと言い出し，しかも理由はいっさい告げなかったという[24)]。黄秋耘は，それを彼の背後にいる周揚の指示によるものであろうと推測し，そう推測する根拠を次のように語っている。

秋耘：私の記憶では1987年[25]。その年が周揚が広州へ来た最後になったんだが，珠島賓館に泊まっていて，秘書に電話を掛けさせて，私一人で部屋へ来るようにと言うんだ。私が行くと，彼は秘書や夫人の蘇霊揚にさえその場を外させて，二人っきりになった。

（中略）

しばらくして，私は率直に訊いてみました。「周揚同志，はじめあなたも私を右派にするよう主張しておられたのに，後にはなぜ反対なさったのですか。邵荃麟から，私を右派にしないことを決定したのは周揚同志だと聞きました」周揚は私の質問をきくと，「私が何度も考慮もし，上に指示も仰いだのには，二つ理由がある。（上に指示を仰いだ，というのは，恐らく陸定一のことだろう）その後君の経歴を調べてみて，君が一時期非常に重要な仕事（具体的に情報工作とは言わなかった）をしていたことが分かった。そういう人間を党は保護しなければならんのだ。それは個人的な理由からではない。もし君を右派に指定したとしよう。一般の刑事罰とは違って，監禁するわけにはいかんから，そのまま自由にしておくと，亡命しようと思えば亡命できるわけだ。君には海外に親戚友人が多く，その中には外国人も含まれていて，君と直接連絡が取れる。君が亡命すれば，外国にとっては至極重宝な存在であって，いろいろ聞き出そうとするだろう。君がかつての仕事の内容を話せば，わが国にとって損害は大きい。もちろん君がそんなことをするとは思っていないがね」私はただじっと聞いているだけで，何も言いませんでした。「もう一つの理由は，繰り返し考えてみたが，君がほんとうに反党的な連中とは違うということだ。君が書いた文章は，君自身が責任を負っている。文章が発表される前に，韋君宜にも邵荃麟にも見せてはいない」それは事実で，私は自分の文章を，たとえ自分の女房であっても発表前に他人に見せるのはいやなんだ。「その二つの理由から，君を右派にはしなかった。君が過去にやっていた仕事は，期間もかなり長いし，関わった範囲も相当広いし，対敵工作にも従事して日本人機関にも出入りした。もしそれをみんな話されたら，おもしろくないことになる。だから，君のような人間を，党は右派にできないのだ」[26]

日中戦争勃発直前の1937年の初め，入党して間もない黄秋耘は，北平軍事調処総部から全国に派遣された36の特別執行小組の一員として広東に赴いた。以来49年の内戦勝利までの彼の活動は，非常に複雑であり，そのことを詳述するだけで一編の論文が必要であると思う。ここでは，上の談話にでてくる日本人機関云々について

注釈めいたことを記しておくにとどめたい。

黄秋耘の自伝『風雨の歳月』の記すところによると，日本人機関というのは，戸根木という姓の人物が指揮していたもので，戸根木は表向きは在香港副領事の職にあって，土肥原賢二とは陸大で同期であったという。黄秋耘は，この機関で通訳をしていた台湾出身の鄭という男に近づき，彼から情報を得ていたというのである。たとえば，日本軍は，“銀弾”と称して，国民党軍の将官に金員をわたして買収し，“和談”にもちこもうとしたことなども，鄭から聞き出した情報の一つであったという。

Ⅲ

１．どうして何も発言しないんです

張賢亮の『我が菩提樹』でもよいだろう，王蒙の『失態の季節』でもよいだろう，いわゆる新時期文学は，中国の知識人たちが政治運動において，保身のためにいかにはげしくお互いを批判しあい，お互いの“いくつかの事実を暴露”しあうことに汲々としていたかを知るよすがにことかかない。彼らの置かれていた状況の厳しさを思うとき，われわれは，自然，彼らがまったく総崩れであったという印象をもつ。たしかに，数億のなかの何人というのは，統計的には無視してかまわない数であろうし，総崩れであったという方が全体的な状況なり実勢なりをむしろ正確に叙述しているということであるかもしれない。しかし，そのように言ってしまうことは，一見全体を厳しく処断しているかにみえて，その実各自の自責の念を希薄にし軽減する宥しのメカニズムが構築されることでもある，ということに気づかねばなるまい。すべての者が悪を為し，そうすることが必然的であったとすれば，誰に対して良心の呵責を感じればいいのだろう。そのうえ，それは事実としても誤っている。それがまさしく暁天の星のように寥々たるものであったにせよ，劉賓雁への批判闘争に加わることを拒んで自ら命を絶った戚学毅[27]や批判発言を迫られながら，従維熙が右派であるとは思えないと言い切り，文革中を通して従維熙の家族との行き来を絶やさなかった房樹民[28]のような例外的存在は，確かにあったのであり，決して無視されるべきではない。そして，黄秋耘もそのような人間のひとりであった，少なくともあろうとしていたと思われる。そのように考える根拠として，まずインタヴューにおける黄偉経の次のような発言を引いておきたい。

偉経：秋耘さん，私が知っている限りでは，あなたはこれまでの人生で，馮大海の事案[29]を除けば，いかなる人に対する粛清にも加わられたことがないと思うのです。これは，古参の党員としてはたぶん稀なことでしょう。厳文井のような，穏和な“老延安”でさえ，ある文章の中で，自分の五十年の人生は，すべてこれ批判し批判されるということだった，と書いています。[30]

さらに黄秋耘が作協時代に親炙していた作家陳翔鶴を追悼した文章の次のような一節にも，そのような彼の生き方，生きる姿勢がみてとれる。

だが，好事魔多し，そんなのんきな日々は長続きしなかった。五五年の春，暴風雨がやってきた。しょっぱなが反胡風闘争，粛反運動，つづいて中国作家協会は連続十三回にわたって“党組拡大会議”を開き，丁・陳反党集団に対する批判を行った。会議参加者の範囲は広くなく，参加したのは行政十三級以上の“中・高級党員幹部”に限られており，通常二，三十人のみで，最高でも五十人を超えなかった。だから，誰もが発言，最低限態度表明の発言をすることがもとめられた。

だが，ひと言も発言しない人間もいた。ひとりは翔鶴同志，そしてわたしもそのひとりだった。ほかにも二，三人よその単位から参加している人がそうだった。当時わたしは，文芸界の仕事について日が浅く，実際誰が正しくて誰が間違っているかはっきりしなかったし，切りもなく出てくる“検挙”“摘発”の材料の真偽も定かではなかったのだ。会議は延々と続けられ，午後の三時に始まって，夜の八時前後に終わるということもしょっちゅうだった。わたしは，会議に出ていても，“吾がことにあらず”で，ひたすら，こんなこと何もかも早く終わってくれ，とばかり願っていた。心の底からうとましく，うんざりだった。

あるとき，休憩時間に，庭に出て翔鶴同士にたずねたことがあった。「どうしてなにも発言しないんです」彼は，わたしに向かって苦笑していった。「うーん，事態がよくのみこめないからさ。それじゃ，君だってなぜ発言しないんだい」わたしも彼の調子をまねて答えた。「ぼくですか。やっぱり事態がよくのみこめないんですよ」わたしたちは，言わず語らずのうちに，お互いが，この政治運動やこのような批判大会のやり方についてどう考えているかを理解しあったのだった。[31]

2．一生の過ち

では，黄秋耘が建国後の度重なる政治運動のなかで一貫して完全に“沈黙”に耐え，他者への批判キャンペーンに一度も加わったことがないのかというと，残念ながらそうではない。作協の党組に強制されて，『反マルクス主義の胡風文芸思想』『胡風は青年たちをどこへ導こうとしているか』という2編の批判論文を書いている。どの刊行物も胡風を批判する文章を載せねばならず，それも刊行物の責任者が書かねばならなかったという当時の状況から考えれば，事実上彼には書かないという選択肢は残されていなかったと言ってよいが，たとえそうであったとしても，しょせんそれはいいわけであり，書いたという事実が消えるわけではない。黄偉経も前節で引いた彼を高く評価する発言に続けて次のように言っている。

偉経：……ところが，解放後の反胡風というこの時には，あなたも命に従って火薬の臭いが強い大批判の文章をお書きになった。ちょうど巴金老が井戸に落ちた胡風の上から石を投げ入れたように。これはたぶんあなたの生涯の中で犯された一大愚挙であり，良心に背くことだったのではないでしょうか。

秋耘：あの時は組織の決定で，書かないわけにはいかなかったのです。馮大海の場合も，組織が私に担当させることに決めたので，やらざるを得なかった。[32]

しかし，これは，決定的に重要なことだと思うが，彼は，心ならずであれ自分の行った悪を自覚しており，かつまた，当時の中国国家，中国共産党政権，あるいは毛沢東の権威・権力にとって，胡風という一文学者，もしくは胡風の文学に対する考え方が，その存立を脅かす一大脅威であり，胡風集団事件という一大政治疑獄は，どうしても必要なものであったなどという，およそ一片のリアリティーもない擁護論をもちだすことによって権力者に免罪符を与え，そうすることによって同時に自分の疚しさをも救おうなどとはしていないということである。

以下に引いたインタヴューの一節が，はたして上記のことを十分に証し立てているかどうかは，わからぬが，少なくとも黄秋耘の胡風事件に対する見方が，きわめて説得的かつ本質的であり，徹底して批判的であるとはいえよう。彼はまず，楊憲益[33]の漢詩の「開国　應ニ興スベシ文字ノ獄　坑儒　方ニ顕ハル帝王ノ威」という句を引いて，「建国したら文字の獄を起こして，ある種の人々を弾圧してみせるべきだ。“坑儒”つまり知識分子たちをやっつけてこそ，帝王の権威を顕示することができるというわけです」，「彼（楊憲益：廣野）の詩集のこの二句は，なぜ胡風事

件という文字の獄が起こされたかを説明しています。胡風事件を起こした目的は，一つには，胡風らのような文人，知識分子を“生き埋め”にすること，一つには，おまえら知識分子が，また言うことを聴かないようなことがあれば，胡風の二の舞を演じさせるぞ，という見せしめにするためです」と，胡風事件をフレイムアップ化した毛沢東の意図を解釈してみせる[34]。つづいて，その解釈を裏づけるべく，毛沢東本人が直接胡風批判にコミットする様を林黙涵などの証言を通して具体的に描き出している。

偉経：秋耘さん，今となっては，かなり明らかなことですが，胡風グループ事件というのは，解放後に，毛沢東が自ら指示し，指揮してこしらえあげた最初の文字の獄だったんですね。

秋耘：まったく彼がこしらえあげたんですよ。

当時，私だけが怪訝に思ったんじゃなくて，林黙涵でさえ驚いていました。[35]

秋耘：私は，ずっとこんなふうに考えてきました。この事件は，うまい機会をとらえたものなんだと。あの頃ちょうど知識分子の不満を押さえつけるための文字の獄を仕立て上げようとしていたんです。『武訓伝』批判でも文字の獄に仕立て上げられなかった。兪平伯の『紅楼夢』研究でも文字の獄にまではしきれなかった。ちょうどそういう時に舒蕪が胡風の大量の私信を提供してくれた。願ったり適ったり，ジョーカーが舞い込んできたってわけですよ。その中からたくさんの文章が作り出されました。その後の，大量の編者の意見は，すべて毛沢東が自分で書いたものだったんです。第一集，第二集，第三集，公開されたいわゆる秘密書簡なるものに，なぜ，かの人（毛沢東：廣野）が労苦も厭わず自分で意見を書いたんでしょう。初めは指名された何人かの人が意見を書いていました。林黙涵も目を通し，手直ししていたんです。しかし，かの人のところまでいって，すべてボツにされたんです。君たち物書きや新聞屋は，政治というものが解っておらんッ，というわけだ。たとえば，胡風が何其芳や劉白羽のことを“黄馬褂（ホワンマアグア）”といった不平の文句も，かの人には，胡風が共産党に対して恨み骨髄なんだ，と見える。恨み骨髄という表現まで意見の中に使うんだから，まさに言いたい放題，自分の言うことが即事実ということですよ。胡風は劉白羽らに不満があって“黄馬褂”と言ったに過ぎません。“黄馬褂”というのは，つまりは欽差大臣（勅使）ということでしょ。いまやその言葉が共産党に対して恨み骨髄であることの証拠になった

以上，どんな重大事件にだって仕立て上げられるし，どんな罪名だって着せられないことはない。だから，胡風グループ事件全体を，実質上“開国應興文字獄，坑儒方顕帝王威”という二句が言い表しているというわけなんです。[36]

最後につけくわえておけば，蕭也牧が「寂寞」という言葉を使ったのは，魯迅の『吶喊自序』を意識し，それをふまえたものであろう。魯迅の記すところによれば，それは，文芸による中国人の精神の改造を企図して刊行しようとした雑誌『新生』が“流産”のような運命をたどって以来，彼の心に「毒蛇のように」「まつわって離れ」なくなった，「見知らぬ人々の間で叫んでみても，相手に反応がない場合，賛成でもなければ反対でもない場合」に感じる「无聊wúliao」の思いであるという。ちなみに，中国で出ている何種類かの辞書[37]によって「无聊」を引いてみたとき，幾つかの語釈があるうち，「（精神）没有寄托；空虚」「郁闷；精神空虚」というのが，この場合における，この言葉の説明として，もっともふさわしいもののように思われる。夢や，希望や，理想などたくすところがないのだ。なぜなら，それらのものは，ほんとうは無いものだから。さりとて，実在の世界には，何らの意味もない。空しく，鬱屈した思い。宙づりにされたような不安。意味あるかのように語ること，語られるものの虚偽性の自覚と，現実世界の無意味であること（虚無）から目をそらさず，それに耐えようとする高貴な精神がおぼえる一種のさびしさに通ずるもの，それこそ魯迅の「寂寞」ではなかろうか。

たとえば，胡風批判の特集を組んだ『文藝報』の目次[38]に，われわれは，いくつものなじみ深い名前を見いだすことができる。それが，茅盾であり郭沫若であるのは，納得するというのでもないが，少なくとも驚きや奇異な感じをもつことはない。しかし，葉聖陶，梅蘭芳，劉紹棠という名前を見つけ，彼らが「偽善の仮面と悪辣な真面目」だの「胡風の反党，反人民の活動の真相を徹底的に暴露せよ」と題した文章を書いているのを目にするとき，やはりある種やるせない気持ちが起こるのを禁じえない。おそらく彼らのうちの多くは，ほんとうに公憤に駆られ，自主的積極的に批判闘争に加わったのではなく，それぞれの立場上胡風に対して一線を画することを表明することによって，踏み絵を踏んでみせざるをえなかったのではないかと思われる。だが，そうではあっても，しょせんそれは，一個人の保身の意図に発したものであり，とうてい上に述べたような魯迅の「寂寞」に擬すべくもないことはあきらかである。

黄秋耘が，他人を批判する声を上げなかったとき，寂しい思い（寂寞）であった

かどうかはわからない。たとえ彼が寂しい思いをしたとしても，魯迅のそれと同じものであったとも思えない。しかし，彼は，胡風事件を経験して以後，自分の能力やら忠誠心やらを評価されたいという，人間の心に遍く巣くう誘惑に身をゆだねること ―― 魯迅は，それが“ホンモノの奴隷（奴才）”の心性だという[39] ―― に自覚的に向きあい，抵抗した。つまり，沈黙し続けることの寂しさ，辛さに耐えようとしたことは間違いない。

註

1）廣野行雄「丁玲の『吾々夫婦のあいだ』批判をめぐって」(『駿河台大学論叢』第29号，2004年１月刊)，84-85頁。

2）『黄秋耘文集』全４巻広州：花城出版社，1999年。

3）『不要在人民的疾苦面前闭上眼睛」前掲２）第２巻所収。

4）「锈损了灵魂的悲剧」前掲２）第２巻所収。

5）「犬儒的刺」前掲２）第２巻所収。

6）「刺在哪里？」(『文艺学习』1957年第６期原載）前掲２）第２巻所収。

7）「杜子美还家」(『北京文艺』1962年４期原載）前掲２）第３巻所収。

8）「鲁亮侪摘印」前掲２）第３巻所収。

9）この間の様子は，陈白尘『牛棚日记』北京：三联书店，1995年刊が参考になる。

10)「文学路上六十年―老作家黄秋耘访谈录」(『新文学史料』1998年第１期，104-138頁。第２期，65-100頁，人民文学出版社刊)。後に読者からの書信などを付記して前掲２）第４巻に転載。

11)「文学路上六十年―老作家黄秋耘访谈录」(上）(『新文学史料』1998年第１期，人民文学出版社刊）121頁。

12）叶永烈『反右派始末　上・下』乌鲁木齐：新疆人民出版社，2000年10月刊，157-160頁。

13)「风雨年华」前掲２）第４巻所収。

14）正式名称は，中国作家協会。1953年10月に中華全国文芸工作者協会を改組して成立。『人民文学』,『文藝報』などを発行。

15）原文は,「打手dǎshou」。雇い主のために，他人を脅したり，害したりする人間。

16）前掲11）127-128頁。

17）前掲11）130頁。

18）前掲11）120頁。

19）行政事務職公務員の等級は24に別れており，通常17級以上が“领导干部”(指導幹部

である。13級以上は，高級幹部であり局長クラス以上に相当する。

20）正式名称は，中国共産党中央対外連絡部。中国共産党中央の直属機関。

21）「文学路上六十年―老作家黄秋耘访谈录」（下）（『新文学史料』1998年第２期，人民文学出版社刊）67-68頁。

22）「我认识的韦君宜同志」前掲２）第１巻所収。

23）前掲11）119頁。

24）前掲11）122，130，137頁。

25）「新文学史料」掲載のインタヴューを『文集』第４巻に転載した際付された註によれば，周揚が最後に広州を訪れたのは1984年６月のことであり，同年９月に発病し会話が困難になったという。したがって，1984年の記憶違いであろうと思われる。

26）前掲11）123頁。

27）前掲21）69頁。戚学毅は死の前に「私にどうしても摘発の発言をしろというのは，黄秋耘がいう『魂を錆びつかせた悲劇』じゃないか。魂を錆びつかせて生きていても何になる。死んだ方がましだッ」と言ったという。

28）从维熙「走向混沌」『从维熙文集・第三卷』北京：华艺出版社，1996年刊，461-464頁。

29）『文芸学習』の編集者で，創作班の代理係長だった馮大海が胡風集団の一員であるとの嫌疑をかけられた冤罪事件。黄秋耘は，『文芸学習』の指導幹部であったことから馮大海審問調査会の班長を務めさせられた。黄秋耘は，厳密な事実調査を積み重ねた結果，馮大海を党籍剥奪と他の部署への転属という軽い処分で釈放させた。胡風集団事件で刑事処分，行政処分を免れたのは，馮大海ただ一人であったという。

30）前掲21）83頁。

31）黄秋耘「“十年生死两茫茫”―追念陈翔鹤同志」前掲２）第１巻，176-177頁。

32）前掲21）83頁。

33）現代の著名な翻訳家。1915年生まれ。1934年イギリスに渡り，オックスフォード大学でヨーロッパの古典文学を学び修士号を取得。40年に帰国し，重慶，貴陽，成都などの大学で教壇に立った後，南京の国立編訳館に勤務。52年，北京外文出版社に転じ，『中国文学』編集長となった。主に訳業には，バーナード・ショー『戯曲集』，ホメロス『オデッセイ』など。また，『紅楼夢』，『史記』，『魯迅選集』などの中国文学の英訳もある。

34）前掲21）81-82頁。

35）前掲21）82頁。

36）前掲21）85頁。

37）『漢語大詞典』上海：上海辞書出版社，1986-1993年。『应用汉语辞典』北京：商务印书馆，2000年。

38）『文艺报』1955年第５期，第９，10期合併号。

39）魯迅『野草』「聡明人和傻子和奴才」は，そのことをもっとも端的明瞭にものがたっている。